

大岡くんがひどい目に遇う話

まーぼう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り。

俺ガイルの三馬鹿の一人、童貞風見鶏こと大岡くんが主人公の話です。

基本1話完結で、それぞれ自分の好きな古い作品のパロディです。元ネタ分かった人、結婚しましょう。

残酷な描写は一応念の為に。残酷だからね。しょうがないね。

こういうのもアンチヘイトに入るのだろうか。

目次

その男は世界から拒絶される	1
〇の悲劇	13

その男は世界から拒絶される

大岡という男がいる。

作品内では準モブ、弁当に付いてくる緑のギザギザのような立場で読者からは童貞風見鶏などと揶揄されることも多いが、トップカーズトに属している以上、実際にはそれほど酷い立ち位置ではない。

総武高校、2年F組。

野球部に所属し、それなりに活躍もして多少は人望もある。

しかし、彼にとつての最大のステータスは『葉山隼人の友人である』ということだろう。

最高という言葉は『最も高い』と書く。それはそのまま頂点を意味する言葉だ。

しかし現実で最高という言葉が使われる場合、頂点そのものではなく、その周辺一帯を指すことがほとんどだ。

つまり何かの順位付けを行った場合、その中で『最高の成績』を持つ者は複数存在することになるのだ。

総武高校において最高の知名度を持つ人間は、もちろん複数いる。

例えば比類無き支配力を以て女帝として君臨する三浦優美子であつたり。

例えばワガママボディと距離を感じさせない振る舞いで、多くの男の心を掴んで放さない由比ヶ浜結衣であつたり。

例えば恵まれた家柄と絶世の美貌、そして圧倒的な実力で一切の余人を寄せ付けない雪ノ下雪乃であつたり。

あるいは文化祭での事件を皮切りに、瞬く間にその悪名を轟かせた比企谷八幡であつたり。

彼ら彼女らは、さまざまな理由からこの総武校の有名人となった。まさに最高の知名度を持つ人々であろう。

しかし葉山隼人、彼だけは違う。何故なら彼を指す場合に限り、最高という言葉は本来の頂点そのものという意味を持つからだ。

葉山隼人は総武校における最大最高の有名人である。

文武に優れ、他者からの信頼も厚く、一身に期待を集め、そしてそ

れに応え続ける。

誰もが彼を羨み、誰もが彼に近付こうとする。彼の知り合いというだけで周囲の羨望を集める。ましてや彼の友人ともなれば、その恩恵は計り知れないだろう。

そして大岡は、その『葉山隼人の友人』という立場を最大限に利用していた。

実際彼は大した人間ではない。

大きく劣ったところがあるわけではないが、特別に目を惹く部分も無い、つまるところ、ありふれたごく普通の少年である。

彼単体であつたなら、おそらくその名前が読者の目に触れることも無かつただろう。しかし彼は、葉山隼人の勇名に乗っかる形で、多くの読者の記憶に自分の名を刻み込んだ。いわゆる虎の威を借る狐というやつである。

全ての混乱は、そんな彼の何気無い一言から始まった。

ごくありふれた放課後。

特に何事もなく授業が終り、生徒達が一斉に緊張から解放され、友人と寄り道の相談を始める。

そんななんでもない、ごく普通の一日の終りに、大岡少年はふと告げた。

「彼女ができました」

瞬間、時間が停まった。

前触れなく壁掛け時計が落ちた。

クラスメイトとお喋りに興じていた相模南が泡を吹いて椅子ごと倒れた。

先ほどまで快晴だったはずの空に雷雲が立ち込めた。

意味も無く窓が割れた。

グラウンドで大量のカラスと黒猫が戦争を始めた。

滅多に人の来ない教室で、ある人物の湯呑みが人知れず縦に割れた。

ピンポンパンポーン

馴染みの音がスピーカーから吐き出され、ノイズの混じった校内放送が始まる。

『…ザ……めだ!……う終……ザツ……みんな…逃げ……ザザツ……いそ……で!……』

ブツツ!

そんな音を最後に放送が切れる。

それらの惨劇を見送った後、大岡は感情のこもらない声で呟いた。

「………なんでだ」

意味がわからん。自分は恋人が出来たことを友人に報告しただけだというのに。

「なあ、隼………」

「歯を食いしばれ大岡アー!」

「ぶべらっ!?!」

突如頬を襲った魂のこもった一撃に、大岡はきりもみに回転して吹き飛びいくつかの机を薙ぎ倒した。

「大岡……見損なつたぞ、馬鹿野郎!」

そのふざけた幻想をぶち殺す略してそげぶとばかりに右拳を振り抜いた葉山隼人は、熱い涙を流しながら吠える。

「なんでだよ………なんでこんな事になつちまつたんだよ!?!」

「え……何が?て言うか今なんでぶつ飛ばされたの俺?」

「俺は、俺達は友達じゃなかったのかよ!?!なんでこうなる前に一言相談してくれなかったんだよ!」

「だから隼人くんなんの話してんの!?!」

混乱して助けを求めるように周りを見回す。するとその視界に、彼らとも親交の深い三人の女子が入り込んだ。

「えっ………ヒック………うえっ………!」

その三人のリーダー格たる三浦優美子が、床に尻餅を着いて泣いていた。完全にしゃくりあげて言葉にならない彼女を、二人の友人が慰

めている。

「ちよ……どしたんよ、優美子!？」

殴られた痛みも忘れて慌てて駆け寄る。女帝などとも呼ばれるこの強気な少女が泣くなど尋常ではない。

「……して」

彼女の様子を除き込む大岡の耳に、小さな呟きが届く。

その呟きは、三浦優美子を慰める友人、由比ヶ浜結衣のものだった。彼女は涙を溜めた瞳でキツ!と大岡を睨み付け、今度はハッキリと言葉にする。

「どうして大岡くん!?なんでこんなヒドイことすんの!？」

「ええええ!?俺ええつ!？」

身に覚えの無いことで責め立てられ、大岡は思わず仰け反る。そんな彼らに構わずマイペースに三浦優美子の背を撫でていた眼鏡の女子、海老名姫菜が不意に立ち上がり、他人事のように告げた。

「……ああ、もういいや」

「姫菜……?」

「ゴメンね、結衣。私もう行くから。後で優美子に謝っておいて」

「そんな……!待ってよ姫菜!あたしが悪いんだったら直すから……!」

「ううん。二人は何も悪くないよ。悪いのは、きつと私」

「待って……待ってよ……!イヤだよ、こんなふうにおしまいななんて……!」

「さよなら。二人のこと、大好きだったよ。それだけは本当だから」

「姫菜……!」

由比ヶ浜結衣の悲痛な叫びは、しかし友人には届かなかつた。海老名姫菜は振り向きもせず教室を出ていってしまい、後には抱き合うようにして泣き続ける二人の女子。

突然目の前で繰り広げられた友情の崩壊劇に大岡が茫然としてみると、いきなり横合いから胸ぐらを掴まれる。葉山隼人だった。

「何をやってるんだ!お前のせいでこうなったんだぞ!?!はやく追いかけて連れ戻してこい!」

「はいいいっ!?!コレも俺のせいなの!?!」

状況がまったく把握できずにあたふたしていると、背後から良く知る、ある意味では葉山隼人以上に親しい人物の声が聞こえた。

「大岡……」

「戸部エ……みんななんかおかしいんだよ。お前からもなんとか言つて……!?!」

大岡は戸部翔に振り返り、ギョツとして固まる。

戸部翔は普段の人懐こい笑顔の代わりに、目に涙を溜めて情けない表情を浮かべている。そしてその手には……

「大岡あ……」

「なんで泣きながら包丁握りしめてんだよお前は!?!」

大岡は慌てて戸部翔の持つ包丁を叩き落とした。包丁はあつさりとその手を放れ、そのまま教室の隅まで滑っていく。

戸部翔は自由になった手で目元を擦りながら、涙声で訴えた。

「だって、『友達が間違った道に進もうとしてるなら、相手に恨まれてでも止めてやるのが本物の友情だ』って、ヒキタニくんが……」

「ヒキタニいいいっ!?!」

我慢の限界が近かったところに学校の嫌われ者の名前が出て、その姿を探して教室を飛び出す。

別に本気でヒキタニの仕業だと思っただけではない。なんでもいから誰かのせいにしたかっただけだ。

もしかしたらただ教室から逃げ出したかっただけかもしれない。

どちらかは分からなかったし、正直どちらでも構わなかった。重要なのは、教室を出たところで誰かとぶつかったことだろう。

「ぎゃっ……!?!」

ぶつかったのは青みがかったポニーテール。同じクラスの川崎沙希だった。彼女は尻餅を着いた状態でこちらを見上げている。

倒れた彼女に手を差し出す。が、

「わ、悪い!大丈夫か!?!」

「ヒッ……!?!」

川崎沙希は、何故か顔を青ざめさせている。イヤイヤと力無く首を

振る少女に、どうすれば良いか分からずに固まる。

「ヤ……助けて……!」

「ま……待て待て待て!俺がいつたい何をした!」

「イヤアアア!」

「川崎さん!」

涙を流して怯える少女を救い出したのは、このクラスの天使と名高い美少年、戸塚彩加だった。

彼女、もとい彼は川崎沙希を抱き抱えて大岡から距離を取る。それはさながら王子様のごとく。

「川崎さん、大丈夫?」

「戸塚、あんたどうして……」

「これでも男だから。女の子がピンチなのを見過ごせないよ」

「あんた、格好いいよ……」

「ありがと。ここは僕に任せて、早く逃げて!」

「……なあ、俺はいつたい何をしたんだ?頼むから教えてくれよマジで」

心の底から沸き上がるどす黒い感情に、大岡は表現しようのない声をあげる。

真剣な表情で身構える天使を前に、いつそ本当に悪魔になってくれようかなどという考えがよぎった時のことだった。

「待てえい!」

背後から、異様によく通る声が響き渡る。

振り向けばそこにはどこかで見覚えのある、コートに指ぬきグローブの巨漢が腕組みしていた。その男を見た戸塚彩加が声をあげる。

「材木座くん!」

ああそうだ。そういやそんな名前だった。

大岡がそんなことを思っている間に、材木座義輝はドタドタと戸塚彩加達の元へ駆け寄り、大岡と彼らを遮るように立ちはだかる。

「戸塚よ、おぬしが犠牲になることなどない。ここはこの剣豪將軍に任せよ!」

「何言ってるの!材木座くんはケンカなんてできないでしょ!今だっ

て脚が震えてるじゃないか！」

「戸塚よ……やはり優しいな、そなたは。我を心配してくれる者など、八幡以外ではそなたぐらいしか知らぬ」

材木座義輝は、戸塚彩加へと穏やかな微笑みを向ける。

「自分が中二病であったことを感謝したのは初めてだ。友の為に命を賭けねばならぬ場面で、逃げ出さずに済む」

「材木座くん……！」

「往け。その女子を安全なところまで送り届けよ」

「……絶対、絶対戻ってくるからね！それまでに死んじやったら絶交だよ！」

材木座義輝にそう言い残し、戸塚彩加は川崎沙希を連れて去っていった。それらの寸劇を胡乱な目で眺めていた大岡に、材木座義輝は威勢良く見栄を切る。

「ウソップにそげキングがいるように、岡部倫太郎に鳳凰院凶魔がいるように、俺には剣豪将軍が着いている！来い外道！この材木座義輝、そう易々とやられは сенぞー！」

「だから俺が何したってんだよオオオオオオオ！」

大岡は泣いて逃げ出した。

「イヤアアアアアッ！」

「姉さん！落ち着いて、姉さん！」

「怖い、怖い！お願い、助けて雪乃ちゃん！」

「お願いだからしつかりして！姉さんがそんなんじや、私だつてどうしたら……！」

錯乱し、お互いに抱き合って泣きじゃくる雪ノ下姉妹を尻目に学校を飛び出す。

「キヤーーー!!？」

「逃げる逃げる逃げる！立ち止まるな！」

「ふ、ふひ、ふひひ、終りだ！ひやははははっ！」

騒音。爆音。逃げ惑う人々。火を吹く自動車。悲鳴。罵声。

混乱が深まっていく。

なんなのコレ!?何が起きてんの!?

街に出た大岡を待っていたのは、更なる狂乱だった。しかもそれは大岡を中心に広がっているらしい。

滅茶苦茶になった人の流れは、実際の人数以上の人混みを産む。誰もが自分を見失い、どこへ向かえば良いか分からずに右往左往する。そんな中で大岡が人とぶつかったのは、無理からぬことであつたらう。

たまたま偶然大岡と衝突した黒髪の少女、鶴見瑠美は、

「ーはうっ」

大岡を見上げてそのまま卒倒した。

「またかよっ!?!」

嘆きつつも大岡は、倒れた鶴見瑠美を抱え上げる。できれば無視して逃げたかったが、この騒乱の中で放置すれば、下手をすれば命に係わりかねない。

せめて人の居ないスペースに移動させようと立ち上がった大岡の背に、鋭い声が投げ掛けられた。

「貴様、その子をどうする気だ!?!」

「だからなんなんだよコレは!?!」

自分に銃を突き付ける警官に、思わず怒鳴り返してしまった。さつきからやることなすこと全てが悪い方向に働く。いつそ笑いたい気分だ。

「抵抗するつもりか!?!くそ、凶悪な犯罪者を発見!至急応援を願います!」

大声を出したのが不味かったのか、警官が無線機に語りかける。すると出番を待っていたかのごとくスムーズに、わらわらと多数の警官が現れた。さらには有志の民間人らしき、バットや鉄パイプを構えた人物もその中に混じっている。

「油断するなー！確実に仕留めろ!」

「機甲部隊はまだか!?!バカやろう!事件は会議室じゃなくて現場で起きてるんだ!」

「負けん……俺はもう、あんな奴のために誰かが泣くところを見たく

ないんだ！」

もうなんなのマジで？

大岡が何かを諦めて、膝を着こうとしたその時、大岡を護るかのよう
に白い影が飛び込んできた。

「待つてくれ……！どうか、彼を責めないでくれ！」

この騒動の中で初めて大岡に味方したその影は、白衣を纏った国語
教師、生活指導の平塚静であった。

「先生……！」

思いがけず訪れた救いの手に、大岡の眼に涙が滲む。

平塚静もまた泣いていた。

彼女は涙ながらに警官隊へと訴える。

「頼む、彼を見逃してやってくれ。彼は何も悪くないんだ！」

「先生エ……！」

大岡の無実を主張する美女に、警官達が戸惑う。大岡もまた戸惑っ
ていた。しかし彼は感激していた。

「ご免なさい、先生。今まであなたのことをアラサーとか言つてバカ
にしてました。もう二度と行き遅れとか年増とか言いません。てい
うかむしろ結婚してください。」

ごく自然にそんなことを思い描いてしまう。その間にも平塚静の
涙混じりの訴えは続く。

「彼がしたことは確かに許しがたいことかもしれない……だけど、そ
れは仕方の無いことなんだ！」

ん……？

熱い涙を滂沱と流す平塚静の言葉に、大岡は脳内で疑問符を浮かべ
る。いやちよつと待つて。それだとなんか……

「私が……私が悪いんだ！彼が道を踏み外したのは、私が指導の仕方
を間違つたせいなんだ！だからどうか、責めるなら私を……！」

「だからなんでだあああああああつ！」

大岡は再び逃げ出した。

「ちくしょう……！なんなんだよ、これは……!?!」
薄暗い路地裏。

人目を避け迷い込んだここで、大岡は独り黄昏ていた。
なにが起きているのかまったく分からない。つい先ほどまで普通の放課後だったというのに。

なんでこうなった？何がきっかけだ？

「分からないか？」

声に出していないはずの自問に答える声があった。その声が聞こえてきた路地の奥の闇に目を向ける。

「大和……」

闇から歩み出てきたのは、ラグビー部の大和だった。

戸部翔と並ぶ親しい友人の登場に歓喜し、すぐさまこれまでのことを思い出して項垂れる。どうせこいつもおかしくなってるに決まってる……

しかし大和は、大岡のそんな思考を否定する。

「心配しなくても故障なんかしてないよ。俺は、他の連中とは違うからな」

どこか自虐的にも思える呟き。だが、大岡にとってそんなことはどうでも良かった。

「大和、お前何が起きてるのか分かるのか!?!」

「ああ、解決策も持ってきた」

「マジかよ!?!ゴメン！俺今までお前のこと『それな』しか言えないボンクラだと思ってた！マジ見直したよ！」

「……まあ良いけどな。俺だってお前のこと童貞チビとしか思ってたなかったし」

お互いに相当なことを言い合っていたが、希望に目の眩んだ大岡には分かってないようだった。早く早くと解決策をせがむ大岡に、大和はある物を手渡す。

「……何コレ？」

渡されたのは、一本のゲームソフト。

そのラブ〇ラスを手に茫然とする大岡に、大和は大真面目に頷い

た。

「それを持ってみんなの前で『これが俺の彼女だ』と言え。それで全て解決する」

「ハアアアッ!?なんだそりや!」

「お前だつて、本当は解ってるんだろ? お前のあの不用意な一言が全ての元凶だと」

「ふざけんな!?なんでそんなことでこんなわけ分かんねえことになるんだよ!」

その一言に、大和の眼が鋭く輝く。

「……言つても良いのか?」

「な……何をだよ……?」

大和の眼光に、大岡が思わずたじろぐ。そんな大岡に、大和は容赦無く続けた。

「お前は、俺達は、他の奴等とは違う。俺達があいつらを差し置いて恋人を作るなんて、この世界では許されないことなんだよ」

「い……意味分かんねえよ!なんで俺が彼女作っちゃダメなんだよ!」

「決まってるだろ。それは俺達がモブだからだ」

あつさりと言げられたその言葉に、大岡は思わず固まった。

「な……なんだよそりや!なんだよモブつて!?だ……だいたい、今さらゲームが彼女だなんて言つたつて、本当の彼女が消えたり……」

「消えるよ、ちゃんと。世界がそれを許す。物語の都合の前には、俺達の現実なんて何の価値も無い」

「ウ……ウソだ!そんなわけない!俺はモブじゃない!ギザギザなんかじゃない!だいたいそれなら戸部はどうなる!?あいつだつて俺達と変わらないはずだろ!」

「戸部は違う。あいつはモブじゃない」

「なんでだよ!?あいつと俺達と、何が違うつてんだよ!」

大岡の悲痛な叫びに、大和は一旦言葉を切る。

「……もう一度だけ聞くぞ。本当に言つても良いのか?」

それは覚悟を問う言葉。

これを言われてしまえば理解せざるをえない、そんな答え。そんな予感に、大岡は怯えた。

「ま……待て、待ってくれ……」

「戸部が俺達と違うところ……いや、俺達が他の奴等と違うところ」「やめろ！やめてくれ！」

「俺達にはな……名前が無いんだ」

「うわあああああああつ！」

人気の無い路地裏に、とあるモブキャラの悲痛な叫びが響き渡った。

〇の悲劇

それはさる二月十三日、つまりはバレンタインデーの前日の出来事だった。

その日は市民ホールにてある小さなイベントが開かれていた。総武高校の生徒会主催による料理教室である。

すでに想像は着いているだろうが、この時期に料理教室となると当然の如くチョコ作りである。

総武高校主催とは言っても参加者は総武校生徒のみには留まらなかった。

クリスマス以降何かと縁のある海浜総合学園や近所の小学生などから、意中の男子にチョコを贈りたい乙女や単なる興味本意の女子。そして、それらの女子達からあわよくばと期待する男子などそこその人数が集まり、イベントは小規模ながら中々の盛り上がりを見せた。

そうして参加者達が良い気分の時を過ごし、成功のままにお開きとなるかと思われた頃、事件は起きた。

「あれ?」

イベントに参加していた大岡少年がそんな声を上げたのは、鞆を開いた時だった。

大岡は友人である戸部が「どしたん?」と声をかけてくるのを尻目に己の鞆をまさぐり、見覚えのない包みを取り出す。

ギンガムチエツクの包装紙。それが袋状に丸められ、ピンク色のリボンで手に納まる程度の大きさにまとめられている。

もしかして。

そんな期待に大岡の鼓動が高まる――前に、

「おお!それもしかしてチョコじゃね?」

「そんなバカな――!!??」

こちらの手元を覗き込んでいた戸部が自分と同じ予想を口に出し、それを聞いた大和があり得ないと絶叫した。

「そんなバカな……?」

「あ、いや」

大岡がこめかみに青筋を浮かべて睨み付けると、大和は誤魔化すように視線を逸らした。それはともかくとして、大和の大声に誘われて人が集まってくる。

「なにになに?」

「どうかしましたか?」

イベントの主催者である生徒会長一色いろはと、特別講師として招かれた雪ノ下陽乃である。その後ろにはイベントの手伝いを依頼された奉仕部の面々や、前生徒会メンバーの姿もあった。

大岡にとつてほとんど接点の無い面子である。しかし特に隠すようなことでもない、普通に答えた。

「いや、なんか俺の鞆にチヨコが入ってて……」

「! めぐり、出入口を封鎖! 全員逃がさないで!」

「証拠品チヨコを押収! 鑑識に回してください! 指紋を着けないように気を付けて!」

「どういう意味だ!」

常識ではあり得ない事態に対応した陽乃、及びいろはに対し、大岡はたまらず声を荒げた。そんな大岡に、いろはは完全に真顔で説明する。

「こんなことする女子はキチンと見つけ出して指導しなきゃダメじゃないですか」

「非行みたいに言うな!」

「雪乃ちゃん、別室で一人ずつ事情聴取してくれる? 私の指示に従うのはシャクかもしれないけど……」

「バカにしないで。非常時に私情で規律を乱すような人間だと思ってるの?」

「いや非常時ってなんだよ」

「前生徒会役員めぐり達は誘導をお願い。雪乃ちゃんがスムーズに事情聴取できるようにしてあげて。ガハマちゃんというはちゃんはみんなに事情を説明。不安がつてるはずだから落ち着かせてあげてね」

「なんか事件つか災害扱いになってませんか?」

「比企谷くんは私の助手を。現場検証するからどんな些細な異常も見逃さないように。それじゃみんな、散開！」

「聞けよ!？」

陽乃の的確な指示に全員が迷いなく動き出す。

大岡少年の声を聞く者は、誰もいなかった。

「それでは情報をまとめます。まずは事件の発生状況を」

「だから事件ってなんだよ」

「大岡くん、邪魔しないで」

「……」

全員への事情聴取が終わり、雪乃が切り出す。少々疲れを見せながらもその瞳は精力的で、その内には悪に対する怒りの焰をたぎらせている。

陽乃はそんな妹と対称的に冷たい声で語り始めた。

「事の発端は本日17時前、今回のイベント終了の直前。大岡少年（以降、甲）の鞆（以降、乙）からチョコレートらしき物品（以降、丙）が発見されました。」

乙を含む個人の手荷物は、数が多く作業の障害になると思われたため、ロッカールームにまとめて預けられていました。

主催者である生徒会メンバーが手荷物をこの部屋に運びこんだのは、イベント終了時刻の直前。それから甲が丙を発見するまでほとんど時間はなかったものと思われまます」

「なるほど……。つまり、犯行はイベント中にロッカールームで行われたということね」

「ちよい待てやオイ。犯行ってなどという意味だ」

姉の言葉を受けての雪乃の呟きに、大岡がたまらずツツコミを入れる。もちろん誰も聞いてない。

陽乃は妹の言葉に重々しく頷いて続けた。

「犯人は……」

「だから犯人ってなんだあ!？」

「犯人は我々がイベントを楽しんでいる最中、人知れずロッカールー

ムに侵入し凶行に及んだものと思われれます。

内部犯、つまりイベント参加者による犯行であれば、周りに見つからないようにこの部屋を抜け出す必要があります。もし部外者の仕業なら話は違いますが……」

陽乃のセリフの途中で出入口のドアが開いた。

入ってきたのは前生徒会役員を引き連れた城廻めぐりだ。

「ハルさん、鑑識の結果が出ました」

「マジで鑑識してんじやねえよ!?!」

「めぐり、それで?」

「中身はやはりチョコレート。手作りの造形とわずかに荒熱が残っていたこと、それと包み紙の購入先から、このイベントで作られた物で間違いないだろうとのことですよ」

「そう……」

「姉さん、やつぱり……」

「ええ」

報告に陽乃は無念そうに首を振った。

覚悟はしていたとはいえ、やはり現実に事実として突き付けられるのは重みが違うのだ。

しかしそこは雪ノ下陽乃。すぐさま意識を切り替え、毅然とした態度で断ずる。

「犯人は、この中にいる」

「……なあ、もう帰っていい?」

場の一同が恐ろしい事実には戦慄する中、大岡は独り黄昏ていた。

場の一同が、揃ってわずかに身を退いた気がした。互いが互いを疑い合い、それが物理的な距離にも現れたのだ。

「容疑者を絞りましょう」

そんな重苦しい空気を切り裂いたのは、やはり陽乃だった。

ちなみに大岡（というかむしろ風見鶏）がなにかブツブツ呟いていますが、勿論誰も気にしない。

「でも、容疑者を絞るって言ってもどうやって……」

「そのための事情聴取だろ。雪ノ下」

陽乃を不安気に振り仰いだ結衣に、八幡は事も無げに告げて雪乃を促す。雪乃は部員二人に頷き話し始めた。

「まず、事情聴取によると、他の人の鞆からはチョコレートは発見されませんでした。このことから犯人は単独犯である可能性が高いと思われると思います」

「二人で行ったんなら『一緒にやろ♪』ってなるもんね」

結衣の言葉に雪乃は頷く。二人とは限らないが結衣の言う通りなのである。

犯行が複数人で行われる場合、それぞれが背負うリスクは均等でなければならぬ。特定の誰かのリスクが極端に軽い、あるいは重いと、それが内輪揉めの種になってしまう。

今回の場合、仕込まれたブツは1つ。

複数の女子が共同で1人の相手にブツを渡すのなら、隠れて渡すことにはないだろう。つまり実行犯は1人ということになる。

仮に複数犯の仕業だった場合、主犯がブツを仕込んで共犯者が見張りに立つという形になるだろうが、それだと主犯にデメリットしかない。

そもそも他人に知られたくないから隠れてブツを仕込んだのだらうに、他人に協力を求める意味がわからない。

そんなわけで雪乃の言う通り、単独犯であることはほぼ確定だろう。

「あの、ちょっと待ってください。それって難しいと思うんですけど」
しかしそこで否定的な声をあげる者がいた。

今回のイベントの主催者である一色いろはだ。

「どういふこと？」

雪乃が怪訝そうに尋ねると、いろはは顎に指を当て、計算され尽くしたあざとい仕草で語りだした。

「ロッカールームの鞆にチョコを入れるって、この部屋から1人で出ないと無理ですよね？」

「ええ、当然ね。だからこれまでに出了た情報を照らし合わせて犯行可能な人物を……」

「えつとですね、こういうイベントの場合、女子って他の娘を牽制するものなんですよ。怪しい動きがないか監視してるんです。抜け駆けされないように。だから1人で部屋を抜け出した娘がいたら、誰かが絶対気付いてると思うんですけど」

「私はそんなことしてないけれど」

「じゃあ結衣先輩がチョコ持って1人で部屋出ようとしたらどうします?」

「それは……」

雪乃は思わず言い淀んだ。ほとんど反射的に動いた視線が結衣のものどぶつかり、お互い気まずげに目を逸らす。

監視などしていない。それは断言できる。

そもそもそうした、いわゆる『女子特有』とされる感性が欠如している雪乃には、他の女子を出し抜くという発想自体が浮かばなかった。

しかしである。

それでも尚、結衣がそのような行動をとったのであれば、自分は確実に気付くと確信してしまっていた。そして気付いた自分がそれをどうにかして阻止するであろうことも。

きっと自分は部屋を出ようとする結衣についていくか、もしくは何らかの理由をでっち上げてでも部屋に留めようとするだろうと容易に想像できてしまう。

無論、逆もまた然りである。自分が1人で部屋を出ようとしたなら、結衣はきつと同じ行動に出るだろう。

「……なあ、もう良いじゃん。解散にしようぜ?」

「雪乃ちゃんの恋の鞆当てはまた今度にするとして」

なんか聞こえた風見鶏（というかむしろ大岡）の鳴き声を掻き消し陽乃が声をあげる。

「いろはちゃんの言う通り、女子が1人でこの部屋を出れば、他の誰かが絶対に気付く。むしろ捜査の助けにしかないわ。」

雪乃ちゃん、聞き込みでそういう話はなかった？」

「それが……」

雪乃が沈鬱な表情で首を振る。

雪乃の話によると、単独で部屋を出た女子は1人もいなかったらしい。人の出入りについては特に詳しく聞いていたので間違いないと思う。

「雪ノ下、本当に全員か？」

「正確には小学生に1人だけいたらしいわね」

「んじやその子じやねえの？あの小学生の子たちって、千葉村の時のだろ？」

「あの時は大岡くんはいなかったじゃない。葉山くんか戸部くんならともかく、面識の無い大岡くんにチョコを渡すとは思えないわ」

「んー……まあそれもそうか」

八幡と雪乃が会話してる横ではいろはと結衣が額を突き合わせていた。

「誰か嘘ついてるんじゃないですか？」

「でも嘘吐く意味無くない？共犯でもないのに隠す必要ないじゃん」

「ハルさん……」

停滞しかけた事態に、めぐりが不安気に漏らした。

それ自体には意味など無かったのであろうが、己を呼ぶ声を聞いて瞑目していた陽乃が目を見開いた。

「ん。大体分かった」

「え、マジで？」

陽乃の口からごくごく自然に出てきたセリフに、大岡が思わず頓狂な声を返す。陽乃はそれに頷いて肯定する。

「犯人は男よ！」

「ふざけんな!?!」

「キマシタワー!」

「海老名!?!」

陽乃のとんでもな言葉に大岡が思わず怒鳴る。どっかで赤い噴水が上がったが気にしてられない。

しかし陽乃は、そんな大岡に対し至極真剣な表情で返した。

「ふざけてないわ。女子には全員にアリバイがある。ならば消去法で男の犯行と考えるのが自然よ」

「いやそれはそうかもしれないけど!？」

堪らないのは大岡である。

ただでさえ女っ気の少ない学校生活だというのに、こんな話が広まってはますます彼女のできる可能性が遠のいてしまう。

というかそれ以前に男どもが鬱陶しい。現に今も、戸部や大和や海浜の生徒会どもが「やーい、男にチョコ貰ったー!」「エンガチョー!」と囃し立ててきている。

「チクショー!どこの誰だ!?悪質ないたずらしやがって!」

大岡は思わず涙目で喚き散らす。が、陽乃はそれを否定した。

「いいえ、いたずらじゃないわ。いたずらならチョコが発見された直後にネタばらしをしているはず。だってそれが一番美味しくてリスクも少ないタイミングだから。にもかかわらず、犯人は未だに名乗り出していない。つまり彼は本気だったのよ!」

「ぶふうっ!？」

「我が生涯に……一片の悔い無し……!ガク」

「海老名!？」

「衛生兵!衛生兵!」

陽乃のシャレにならない推理に大岡が吹き出す。それを聞いて、それまで大岡をからかっていた男子たちも血の気が引いていた。

結衣は隣に立つ八幡を涙目で見上げる。

「ヒ……ヒツキー……?」

「おい、なんで真っ先に俺を疑う。俺は一度も部屋から出てねえよ」

「そ、そっか。良かった……」

無論、八幡はジト目で否定した。その後ろでは雪乃が胸を撫で下ろしていたが。

その雪乃にいろはが訪ねる。

「それで、1人で部屋を出た男子って、誰がいます?」

「え?あ、そうね。」

比企谷くんは除外するとして、海浜の生徒会メンバーは常にまとまって行動していたからこれも犯行は不可能。

あとは大和くんも部屋から出ていなかったから、残るは葉山くと、戸部くん……?」

ざわり、と人の波が動き、2人を中心に残して空白ができる。

全員が2人をおののくような目で見ていた。

「お……お前ら……?」

「いやいやいやいや!?あり得ないから!」

大岡の怯えたような眩きに、葉山が慌ててブンブンと手を振る。普段の柔らかい物腰とは比較にならない必死の形相を浮かべ、全力で否定してきた。

「冷静に考えろよ大岡!俺がそんなことするわけないだろ!?ここはみんな落ち着いてもう一度……」

「隼人くんの仕業だー!!」

「何イ!?!」

誤魔化すようなひきつった笑顔で言い訳する葉山に指を突き付け、そのセリフを遮るように絶叫する者がいた。戸部だ。

「戸部!?どういうつもりだ!?!」

「どうもこうもないっしょ!俺は海老名さん一筋だもん!男にチョコやるとか有り得ねーもん!だったら隼人くんが犯人に決まってるっしょー!」

「戸部、貴様友達を売る気かっ!?!」

「先にやったのは隼人くんっしょ!?さつき『俺達』じゃなくて『俺』って言ったの聞き逃してないかな!」

戸部はほとんど錯乱気味に喚きたてる。しかしそれも無理はないだろう。

男にバレンティンチョコを渡した男。

そんな十字架を背負う恐怖に迫られては、冷静でなどいられるはずがない。

無論、葉山とてそんな罪業を背負うのはまっぴら御免である。こうなってしまうては己を守る為に戦わねばならない。

「俺にはアリバイがある！」

俺は確かにコーヒーを買いに1人で部屋を出たが、すぐに優美子といろはが追いかけてきた！

2人の監視を掻い潜って大岡の鞆にチョコを仕込むのは不可能だ！」

「うっせー！そんなの隼人くんならなんとかしたに決まってるっしょ！とにかく犯人は隼人くんだ！」

そんな元友人同士の醜い争いを見ていたギャラリーたちは、2人の言葉に頭を悩ませる。

「確かに戸部っちだと動機がイマイチ……」

「だけど葉山くんにはアリバイが……」

そう。ここにきてまたしても新たな謎が立ちはだかつたのだ。

このままでは事件は迷宮入り、というのはさすがに大袈裟だろうが、長時間拘束されて精神的に参った者たちの気分は似たようなものだった。

そして、そうした空気を打ち砕くのは、やはりこの人だった。

「いいえ、もう1人だけいるわ。全ての条件を満たす人物が」

その、雪ノ下陽乃の堂々とした宣言に、いがみ合っていた葉山と戸部を含めた全ての者が静まり返る。

瞬時に静寂に包まれた空間で、全ての視線をその身に集めながら、陽乃は右腕を真っ直ぐ上に伸ばす。そして人差し指をピンと立て、そのままある人物へと向けて降り下ろした。

「犯人は、あなたよ。大岡くん！」

「ハイハイハイハイハイ!!?!」

完全に虚を突かれた体の大岡に、陽乃は会心の笑みで推理を披露する。

「あなたが自分でやったとすれば全てに説明が付くわ。」

例え1人で部屋を出ようと被害者を装えばそもそも疑われない。いえ、そもそもロッソカールームに行くまでもなく、隠し持っていたチョコをさも鞆から発見したかのように演じれば良い。

ことあるごとにもうやめようとか言ってたのは捜査の妨害ね。バ

レたら困るから。

動機は見栄をはりたかったからよね？」

「ふざけんなおいマジふざけんな聞こえてたんじゃねーかよ!? いやそうじゃない俺がんなことするわけ……はっ!?」

進退窮まった様子の大岡が、背後からとてつもなくイヤな気配を感じて振り返る。

そこに在ったのは無数の同情の眼と哀れみの涙。

第一の獣が顕現しかねない、圧倒的な憐憫だった。

「大岡……お前……」

「そこまで追い詰められてたの……?」

「ちつがーうーちげーって！確かにチョコは欲しいけど！だからってんな惨めなことしねーって！」

大岡は慌てて弁明する。しかしもはや流れは変わることはなかった。

「ゴメンな……あーし、気付いてやれなくて……」

「義理で良かったら私がチョコあげるから、ね……?」

「だから俺じゃねーよ!? つーか海老名お前さっきまで鼻血吹いてくたばってただろー！いつ生き返ったんだよ!？」

「良かったなあ、大岡……今年は女子からチョコ貰えるってよ……」

「そうだ。俺達も友チョコ用意しようか……?」

「戸部お前は嫉妬しろよ！海老名からのチョコだぞ?! 隼人くんもなんで一瞬で戸部と仲直りしてんの!?! 大和テメエ無言で泣きながらサムズアップしてんな!」

次々に投げ掛けられる優しさという名の暴力。

その致命的なまでに心を抉る温もりに、大岡は涙目でーどころか完全に泣きながら訴える。

「違う！俺じゃない！本当にやってないんだ！見るな……そんな眼で俺を見るな!」

「哀しい、事件だったわね……」

半狂乱で泣き叫ぶ大岡に、そんなことを呟きながらポンと肩を叩く者がいた。陽乃だ。

「でも、もう良いのよ大岡くん。ここにはあなたを傷付ける人なんていない。みんなあなたの味方なのよ。だから、安心なさい……」

彼女は慈愛の微笑みを浮かべ、大岡にどこまでも優しく語りかける。その女神のようなノー皮肉ではなく、本当に心からの思い遣りに満ちた慈母のごとき笑顔に、大岡はついに膝から崩れ落ちた。

「俺じゃない……俺はやってない……!」

俺は、俺は無実だあ~~~~!!!!」

彼の叫びは誰にも届くことはなく、みんなはただ大岡の味方であり続けた。

イベントのあった市民ホール前の横断歩道。

日がすっかり暮れて暗くなったそこで、鶴見留美は、信号が青になっても歩き出すことなくたたずんでいた。

「まだ残ってたのか?」

「……八幡こそ」

そんな留美に後ろから気配も無く声をかけてきた八幡に、留美は視線だけで振り返り不機嫌に応えた。

留美はフン、と鼻を鳴らすと視線を前に戻す。八幡はその留美の横に並び、顔を前に固定したまま口を開いた。

「あんま気にしなくて良いぞ。あんなでもリア充だからな。明日にはケロッツとしてるさ」

「……でも、悪いことしちゃった」

「間違えちまったもんはしょうがねえだろ。鞆に名前書いとく高校生なんかそうそういないしな」

落ち込むようにに少しだけうつむいた留美に、八幡はあくまでも変わらない態度で答える。

実際仕方ないことだったのだろう。大岡の鞆はごくありふれた市販の量産品だった。同じデザイン、同じカラーリングの鞆だけで3つはあったのだから。

だから留美が落ち込んでいるのは間違えたことについてだけでは

ないのだろう。その他に、罪悪感と、もう一つ。

罪悪感については、八幡は大した助言はできない。だからもう一つについてフオローを入れることにする。

「……まあ、チョコ渡せなかったのは残念だったな」

「うん……」

八幡の言葉に留美は少しだけうつむきを深くする。そんな留美の様子に八幡は苦い顔を見ると、誤魔化すようにそっぽを向き、頭をガリガリ搔きながら努めて軽い調子で――本人だけはそう思っている――言い放った。

「まあ、あれだ。適当になんか贈ってみれば？男なんざチョコロいからな。女子から貰ったらチョコじゃなくてもそれだけで喜ぶもんだ」

「……そうなの？」

「おう。可愛い女の子からならシャー芯貰うだけで好きになるまである。ルミルミなら100パー惚れるね」

「ルミルミっていうな。……八幡でも？」

「当たり前だろ。実体験に裏打ちされた確かな情報だぞ。俺なら求婚まであり得る」

「……そうなんだ」

留美は先程からうつむいたままだ。そのため八幡からは表情が伺いしれず、自分の励ましに効果があるのか判断できずにいた。

故に八幡は、留美の行動の意味を理解できなかった。

「じゃあ八幡、これ」

「……………ナニコレ？」

「受け取って」

そう言っただけで差し出されたのは1羽の折り鶴。それを両手にちよこんと乗せ、留美は頬を真っ赤に染めて八幡を見上げていた。

その真剣な眼差しにたじろぎながら、八幡はどうか問を返す。

「いやだから何よこれ？」

「折り鶴。余った包装紙を貰って折った」

「いやそうじゃなくて」

「いいから受け取って」

留美は八幡に鶴を強引に押し付けると踵を返し、タタタツと走って信号が点滅を始めた横断歩道を渡ってしまう。

「お、おい」

「八幡、信号」

八幡は慌てて追いかけてしようとしたが、信号はすでに赤に変わっていた。車もないのだから気にすることはないかもしれないが、小学生に注意されては信号無視するわけにもいかない。

留美は戸惑い立ち尽くす八幡に背を向ける。そして首だけを回して八幡に顔を向け、しかし慌てたように目を逸らして口を開く。

「……プロポーズ、待ってるから」

八幡と目を合わせぬまま、真っ赤な顔でそれだけ言い残し、鶴見留美は走り去った。

八幡はしばし呆然と立ち尽くしていたが、ふと我に帰り、受け取った折り鶴を鞆に――大岡のものどまりのまま同じデザインの鞆にしまいいこみ、家路に着いた。